

佳作

「日本の進むべき道」

―災害と人とのつながり―

福岡県立明善高等学校 二年

鳥巢美和

所々に土がむき出しになっている山々。熊本地震から約三年が経ち、町も道も元に戻っていた熊本県南阿蘇村に、私は叔父と農業ボランティアに度々参加している。

二〇一六年四月十四日、21時26分、震度7を記録した大地震が多く、多くの町を襲い、267人が犠牲になった。わずかな時間でたくさんの尊い命を奪い、多くの町を壊し、その町を見た人々は涙を流さずにはいられなかった。多くの人が帰る家を見失い、震災から3年が経った今でも仮設住宅で生活している。時が経ち、復興が進み、震災の爪痕が薄れた今でもボランティアの活動は必要なのか。

南阿蘇村での私のボランティアとしての仕事は、トマト農家の方のトマトの苗に支柱を立てることや、イチゴ農家の方のイチゴのための土作り、といった農業ボランティアだった。被災地でのボランティアといえば、瓦礫や土砂の撤去作業だ

と考える人も多いだろうが、被災してその後復興した地に暮らす人々のために町を活気づけたり、農業のお手伝いをしたりすることも大切なボランティアの1つである。また、復興後のボランティアは、被災者の方々に長く寄り添うことのできるものでもある。今、南阿蘇村に必要なボランティアは瓦礫や土砂の撤去、住宅の再建ではなく、農業ボランティアなど生活支援のためのボランティアである。

では、なぜ農業ボランティアが必要なのだろうか。それは、農家の方の高齢化が進んで農業を続けることが困難であるからである。農家の実態としては、後継者の不足や、高齢化が熊本県だけではなく、日本中で近年の課題となっている。高齢となり、力仕事が難しくなった農家の方が増加しているため、ボランティアによる助けすなわち、人と人とのつながりによる助け合いが必要になってきているのだ。

これからも豪雨などの異常気象や、地震などの自然による災害は起こるだろう。だからこそ私たちはもつと人と人とのつながりを大事にするべきだ。私は、人と人が互いに助け合い、1つの同じ目標に向かって前に進むことの大切さを南阿蘇村のボランティアに参加して、そこで出会った人たちに教えてもらった。

日本人は、そして日本という国は、幾度となく自然災害の被害に遭い、それでも自然と共に生活し、発展してきた。日

本に古来より存在する精神である、自然のものを信仰の対象とし、祀る「アニミズム」からもわかるように、私たちにとって自然とは当たり前前に身近にある存在であり、なくてはならないものである。また、その伝統的精神もこれからも語り継ぐべき日本の伝統でもある。

一方で、災害が発生した際には、国や地方自治体の支援はもちろん大切なことであるが、一番大切なことは、人と人とのつながりといった目に見えないものではないだろうか。災害はその被災地だけでは乗り越えることはできない。災害以前の町に戻すことにも長い時間がかかる。東日本大震災の時も、熊本地震の時も、日本人だけではなく、世界中の人々から被災地へ支援の輪が広がり、たくさんの被災した人々に勇気と希望を与えた。

どんなに自分が大きな震災に巻き込まれても、少しも自分とは関係がなくても、互いに支え合い乗り越えていく。このことは未来に残し、未来でも大切にされ続け、世界に誇ることでできる日本人の精神である。そして、多くの災害を経験した日本だからこそできることは、この経験を後世に残し、減災や防災の知恵や知識、技術を世界に発信し続けることだ。そして災害に向き合い続けることが日本の進むべき道だろう。その日本を創る私たちの若い世代が進むべき道は、常に社会のことに目を向け、関心を持ち続け、過去に学び、前を向

いて生きることだ。

日本の進むべき道を決めるのは、私たちである。そして、その私たちを創るのは今であるだろう。過去の上にか人は立つことができないため、私は未来のために今を一生懸命に生きたい。そして、これからもボランティアとして被災地の人々の役に立ちたい。